学術論文

コロナショックと地方大学の学生教育
－高知大学人文社会科学部の事例を中心に－

岩佐　和幸（高知大学人文社会科学部）

キーワード　コロナショック、コロナ禍への適応、孤立化、学びの「アトム化」から対話的な学びへ、共進化

はじめに

2020年初頭より拡がる新型コロナウイルス感染症は、人々の生命・生存を脅かすだけでなく、経済や社会、文化のあらゆる方面に甚大な被害を及ぼしてきた。特に、コロナショックの中で注目の的となったのが、大学教育の現場である。キャンパスへの入構制限に伴う対面授業の停止や、教員・学生同士の交流の遮断、サークル活動の規制等、教育や学生生活の多方面に深刻な影響を及ぼし、現在も回復に向けた模索が続いている。

そのような中、教育面では遠隔授業の導入をめぐる自律的学習効果や教員の作業負担等の課題が示されるとともに[1]、学生のメンタルケアや課外活動への懸念も多数寄せられてきた[2]。と同時に、コロナ禍での学びの切断を克服し、学生の教育保障や大学教育のあり方を探究したり、コロナ禍でのフィールドワーク経験を交流・記録する等の実践が、各地で続けられている[3]。とはいえ、学生数の規模が異なる国公立大学と私立大学との間では、学生生活や教員－学生関係のあり方において影響の差が表れるとともに、同じ国立大学の間でも、都市部と地方という立地の違いが差異をもたらすことが予想される。

本稿の課題は、地方大学におけるコロナショックと学生教育への影響について、高知大学人文社会科学部の事例を通じて検証することにある。高知大学は教員数553人、学部学生数約5000人の地方国立大学であり、人文社会科学系や自然科学系、医学系の６学部で構成される総合大学である。このうち、人文社会科学部は、教員数54人に対して在学生数1216人であり、学生数および教員１人当たり学生数は学内最大規模である[4]。地方大学ではあるが、学生の出身地は地元出身が少数派で、高知県出身者は全学24％、人文社会科学部33％にとどまり、自宅外生の多さが特徴的である[5]。コロナ禍では、感染の波と教室等施設の制約から、感染症拡大防止のガイドラインに則して2020年前半は全面オ

[1] 例えば、金子元久等『コロナ禍後の大学教育 ― 大学教員の経験と意見 ― 』東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センター、2021年３月を参照。

[2] 「大学の８割『学生のメンタルケアが課題』　とくに心配なのは２年生」『朝日新聞デジタル』2021年９月19日付。

[3] 例えば、大学のあり方については「特集　コロナ時代の大学」『現代思想』2020年10月号、コロナ禍の留学・海外フィールドワークについては、北野真帆・内藤直樹編『コロナ禍を生きる大学生 ― 留学中のパンデミック経験を語り合う ― 』昭和堂、2022年、国内でのフィールドワーク等の実践については、地域経済研究会・『資本と地域』共同企画シンポジウム「これからの地域経済教育・地域経済調査について考える ― コロナ禍の経験をふまえて ― 」2022年８月30日等を参照。

[4] 2022年５月１日時点のデータである。高知大学『国立大学法人高知大学概要』2022年、32-37頁。なお、人文社会科学部は、2016年に人文学部の改組によって設置された学部である。以下では、旧人文学部生と人文社会科学部生の双方を含んだ数値で分析を行っている。

[5] 2022年度地域別入学者データに基づく。同上書、35頁。

ンライン、その後は一部対面での授業が導入され、2022年現在もオンラインと対面の併用状態が続いている。そこで、本稿では、コロナ禍で学生が直面してきた状況や教員側が捉えた学生像について、各種データやアンケート調査を用いて分析・記録し、現状と課題を明らかにしたいと考えている。

以下では、まずⅠ章で学びの土台部分に当たる学生生活の状況を確認した上で、Ⅱ章ではオンライン授業に対する学生の意識を、学生アンケート調査結果から探っていく。その上で、Ⅲ章では教員の目線から学生の実情と教育の変化を検討した後、コロナショックの学生教育への影響を総括し、今後の課題を提示する予定である。

Ⅰ　コロナショックと学生の生活状況

１．コロナ禍における休・退学状況

最初に、コロナショックに伴う学生生活の変化を確認しておこう。

文部科学省の調査によると、全国の国公私立大学における中途退学者の割合は、2020・21年度ともに1.95%、休学者は2020年度2.26%、21年度2.19%と、いずれもコロナ前（中退者2.50%、休学者2.45%）より低い結果であった。ただし、コロナ関係の休退学に絞ると、数値は若干上昇し、学生生活不適応・修学意欲低下、経済的困窮等が主な理由として示された[6]。では、高知大学人文社会科学部の学生・院生は、どのような状況であったのだろうか[7]。

まず休学状況から見ていこう。総数は2020年42人、21年35人であった。内訳は、４年生以上が６～８割と大半を占め、進路再考（32%）、留学・ワーキングホリデー（17%）、一身上の都合（16%）、経済的理由（８%）が主な理由であった。このうち、コロナ関係の休学を抽出すると、2020年度６人（全体の14%）から、21年度８人（同23%）へ増加した。ここでも大半が４年生もしくは修士２年生（全体の８割）であり、進路再考、勤務上の理由の他、一身上の都合や就職活動、留学、経済的理由が主な理由であった。コロナ関連休学が、時期が下がるにつれて高まる傾向がうかがえる。

一方、退学・除籍状況については、総数は2020年度20人、21年度22人であった。内訳は、４年生以上が６割、１・２年生が４分の１を占め、進路変更（24%）、他大学入学（21%）、授業料未納（17%）、就職（14%）、一身上の都合（10%）が主な理由であった。このうち、コロナ関連は１人（全体の５%）→６人（同27%）へ推移し、他大学入学（３人、43%）以外に、一身上の都合や就職、進路変更、留学のケースもみられた。退学・除籍は、コロナ２年目に若干増加したことに加えて低学年も多いことから、他大学への移籍や留学を通じた学びの場のシフトが生じたように推察される。

２．学生生活の深層

ただし、上記の異動データは、あくまで学生が受けた影響の氷山の一角に過ぎない。実際には、休・退学に至らないまでも、広範な影響が生じていることが予想される。そこで、高知大学が全学的に実施した2021年度学生アンケート調査結果を用いて、学びの土台となる生活実態に迫ってみよう[8]。

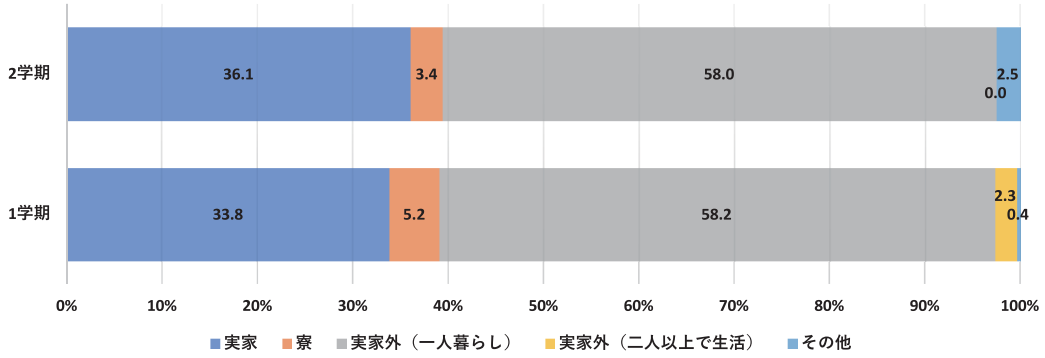
図１は、学生の主な生活場所を学期別に示したものである。一番多いのが実家外（１人暮らし）で、全体の６割弱を占めている。次に多いのが実家暮らし（約３分の１）であり、寮生活を含め、複数人で暮らす学生は４割弱である。

次に、生活面での不安や困ったことを整理したのが、表１である。「特になし」はわずか５%にすぎず、大小にかかわらず不安や困りごとがあったことを示唆している。中でも最も多いのが単位取得関連で、一貫して回答者の４割以上に上った。次に多いのが課題関連で３～４割を占めており、オンライン授業関連が上位に

[6] 文部科学省高等教育局高等教育企画課等『大学等における令和４年度前期の授業の実施方針等に関する調査及び学生の修学状況（中退・休学）等に関する調査の結果について』2022年６月。

[7] 以下では、高知大学学生異動データに基づく。データは、大学院生の数値も含んでいる。なお、コロナ関係は、2020年度は事務側の判断、21年度は自己申告に基づいており、捕捉の差異に留意する必要がある。

[8] 高知大学大学教育創造センター・学生支援委員会『2021年度オンライン授業と学生生活に関するアンケート』2021年・2022年に基づく。人文社会科学部／人文学部生の回答数は、１学期517人、２学期355人である。



注：全学データから人文社会科学部生と旧人文学部生のデータを抽出。

出所：高知大学大学教育創造センター・学生支援委員会『2021年度オンライン授業と学生生活に関するアンケート集計結果』より作成

図１　人文社会科学部・人文学部生の主な生活場所（2021年度）

表１　学生生活で不安なことや困ったこと

1学期	回答者に対する割合	2学期	回答者に対する割合
単位取得に関すること	46.6	単位取得に関すること	41.1
課題に関すること	40.0	課題に関すること	33.0
学内の友人関係を構築すること・維持すること	34.4	就職活動・資格取得	32.1
新型コロナウイルスに感染しないか・他者にうつさないか	28.0	学内の友人関係を構築すること・維持すること	30.7
就職活動・資格取得	28.0	新型コロナウイルスに感染しないか・他者にうつさないか	29.0
部活・サークル・その他の課外活動	21.3	卒業に関すること	23.7
授業形態に関すること	20.7	部活・サークル・その他の課外活動	17.2
卒業に関すること	13.5	その他	17.2
自身の心身不調・病気など健康のこと	13.5	自身の心身不調・病気など健康のこと	15.5
アルバイト	12.6	授業形態に関すること	15.2
インターンシップ	11.2	アルバイト	14.4
経済的問題	10.1	インターンシップ	11.5
学業の継続に関すること	9.1	経済的問題	10.1
アドバイザー教員・授業担当教員との人間関係	5.2	学業の継続に関すること	8.5
大学行事（学園祭等）の開催	4.8	アドバイザー教員・授業担当教員との人間関係	5.9
特になし	4.8	特になし	5.9
家族のこと	2.7	大学行事（学園祭等）の開催	5.1
下宿先・大学周辺の地域の人々との人間関係	1.5	家族のこと	3.7
その他	1.0	下宿先・大学周辺の地域の人々との人間関係	1.1

出所：図1に同じ。

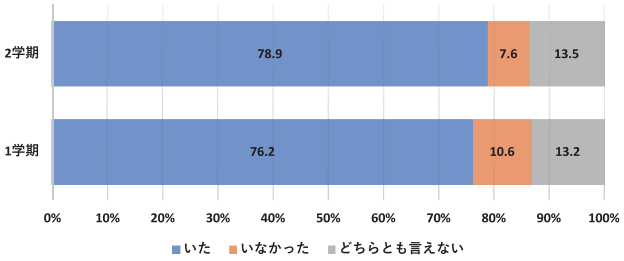
来ているのが分かる。

加えて、１～２学期の変化に着目すると、「学内の友人関係」の構築・維持（34→31%）、「部活・サークルその他課外活動」（21→17%）、「授業形態に関すること」（21→15%）が低下しており、長期化するコロナ禍への適応の様子がうかがえる。対照的に、増加したのが「就活活動・資格取得」（28→32%）、「卒業に関すること」（14→24%）であり、卒業に向けての将来不安が読み取れる。

と同時に、２学期の回答で見逃せないのが、「自身の心身不調や病気など健康のこと」(16%)、「経済的問題」(10%)、「学業の継続に関すること」（９%）である。つまり、１～２割の学生に深刻な経済的・心理的影響が表れており、引き続き留意が必要である。

このような中、相談相手の存在が重要な鍵となる。そこで、図２よりその内実を確認すると、約８割の学生に相談相手がいる結果となった。しかし、相談相手が「いなかった」学生も１割前後存在し、「どちらともいえない」を含め、２割の学生は適切な相談相手が不在である点にも、留意する必要がある。

あわせて、表２より、具体的な相談相手を確認してみよう。これによると、大学入学後の友人、家族、高校時代の友人が、相談相手の中心であることが読み取れる。また、１～２学期の変化に注目すると、高校時代の友人の比率が低下しており、大学入学後の交友関係の変化を表している。と同時に、家族の割合が53→



出所：図1に同じ。

図２　相談相手の有無

表２　具体的な相談相手

1学期	回答者に対する割合	2学期	回答者に対する割合
大学に入ってからできた友人	76.4	大学に入ってからできた友人	76.1
高校までにできた友人	53.6	家族	60.0
家族	52.5	高校までにできた友人	57.9
アドバイザー教員	14.5	アドバイザー教員	17.5
授業担当教員	4.8	授業担当教員	6.8
学生何でも相談室・学生何でも相談窓口	2.3	学生何でも相談室・学生何でも相談窓口	2.9
その他	2.3	保健管理センター	1.8
保健管理センター	2.0	インクルージョン支援推進室（からふるパレット含む）	1.4
学務課（朝倉）・学生支援課（朝倉）・	2.0	国際交流室	1.1
インクルージョン支援推進室（からふるパレット含む）	1.3	学術情報基盤図書館	1.1
高知大学生協	1.0	高知大学生協	0.4
国際交流室	0.3	学務課（朝倉）・学生支援課（朝倉）	0.0
学術情報基盤図書館	0.0	その他	0.0

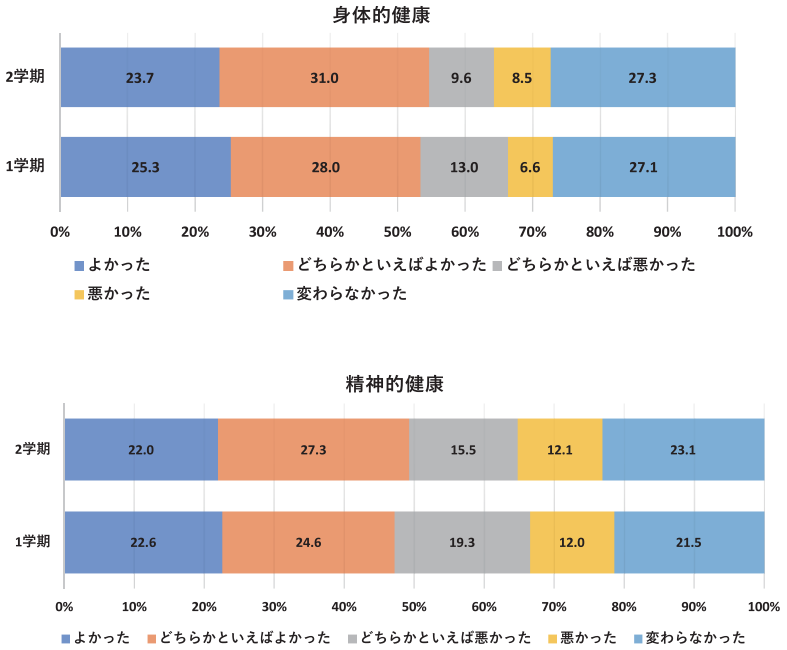
出所：図1に同じ。

60％へ高まっており、自宅生以外も困り事を実家に相談する傾向がうかがえる。一方、大学関係では、アドバイザー教員が15％である以外は、学生何でも相談室や保健管理センター、インクルージョン支援推進室等はいずれも３％以下にとどまった。同調査によると、相談場所の認知度が８割に上っていたことから、学内相談窓口は、日常の相談先ではなく切実な悩みが生じた際の「駆け込み寺」と捉えているように思われる。

では、学生の健康はどのような状態にあったのだろうか。図３は、身体面と精神面での健康状態を示したものである。身体的健康が「よかった」学生は過半数に上る一方、「悪かった」学生は２割にとどまった。これに対して、精神的健康が「よかった」学生は半数を下回る一方、「悪かった」学生が３割を占めており、身体的健康以上にメンタル面で厳しい状態にあったと判断できる。

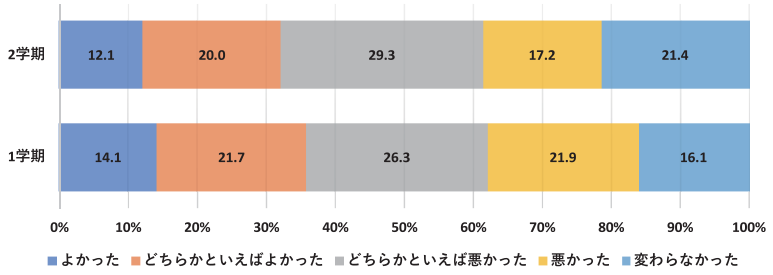
関連して、生活リズムと食生活の状況を示したのが、図４・５である。生活リズムが「よかった」学生は３割強にとどまったのに対して「悪かった」学生は半数近くにも及んだ。同様に、食生活も「向上」は４分の１である反面、「低下」が４割前後で推移しており、食生活がコロナ禍前と比べて質量両面で望ましくない状態にあったと考えられる。

今度は、課外活動に注目してみよう。図６は、部活・サークルの参加状況と困り事を質問した結果である。１年生の部活・サークルへの参加率は、１～２学期にかけて52→67％へ15ポイント上昇しており、新入生の大学生活への参加率向上がうかがえる。これに対し



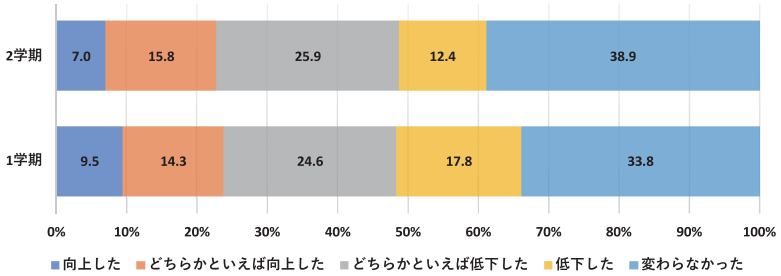
出所：図1に同じ。

図３　身体的・精神的健康の状況



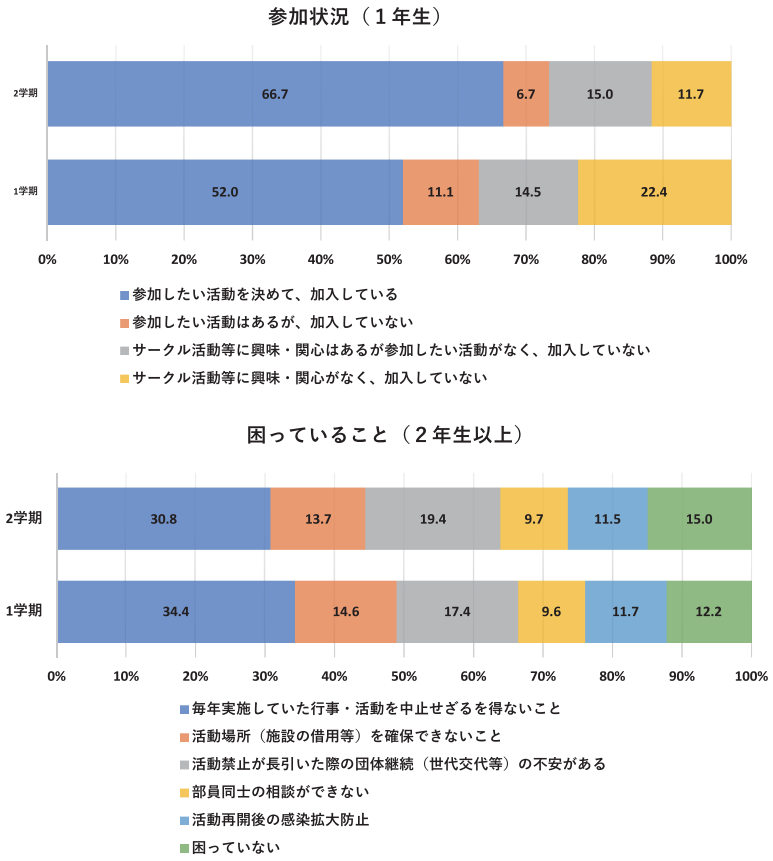
出所：図1に同じ。

図４　生活リズムの状況



出所：図1に同じ。

図５　食生活の質・回数

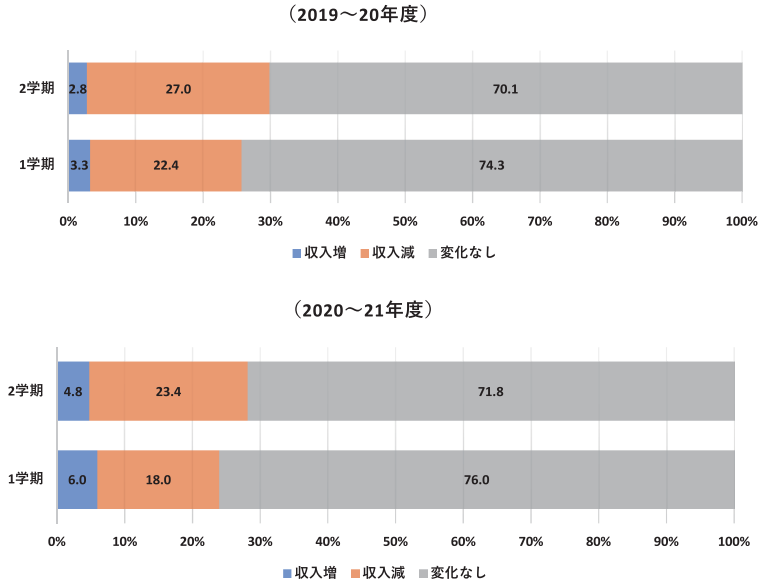


出所：図1に同じ。

図６　部活・サークル等への参加状況（１年生）

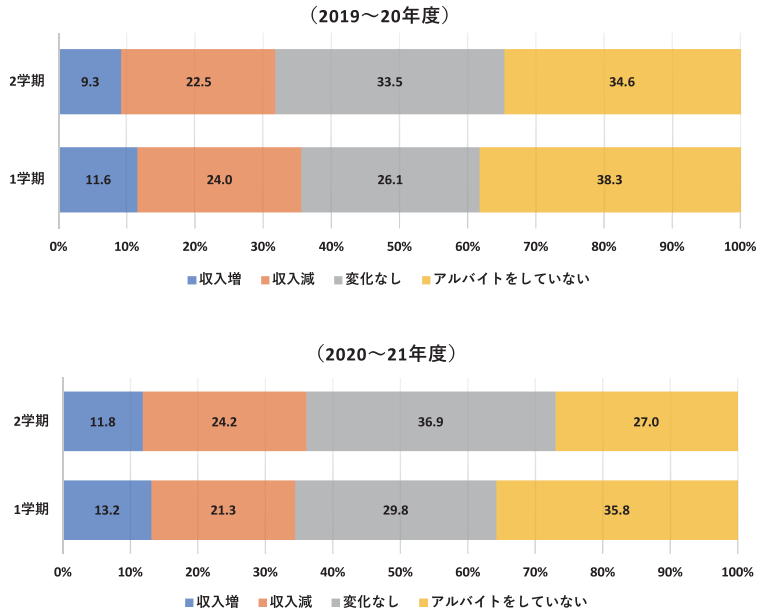
て、２年生以上のほとんどの学生が、課外活動で困っており、「行事活動中止」は３割以上、「団体継続の不安」は２割弱、「部員同士の相談ができない」が１割弱に及んだ。部活・サークル活動の実施に困難が生じていた様子が垣間見える。

最後に、学生の経済状況について把握しておこう。図７は、実家の収入状況についての回答である。コロナ禍前と比べて収入減に見舞われた学生が２～３割に及び、状況は改善されなかった。また図８は、１ヵ月のアルバイト収入の変化をたずねたものであるが、アルバイトを「していない」学生が３割強を占めると同時に、２割以上の学生が収入減に直面していた。実家の収入減とあわせて、経済生活におけるコロナ禍の影を読み取ることができよう。



出所：図1に同じ。

図７　実家の収入の変化



出所：図1に同じ。

図８　アルバイト月収の変化

Ⅱ　コロナショックと学びへの影響

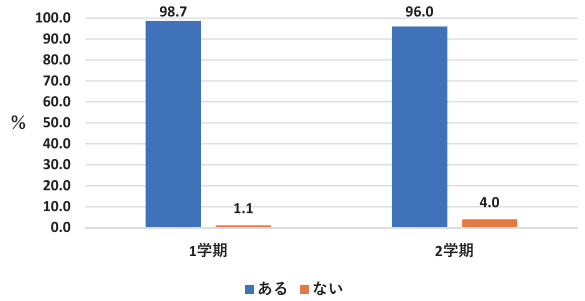
1．オンライン授業の経験と学生の評価

以上を踏まえつつ、本章ではコロナ禍での学生の学びにフォーカスし、学生アンケート結果を軸にオンライン授業の実態に迫ってみよう[9]。

まず、図９は、オンデマンド型授業の受講経験についてであるが、大半の学生が「ある」と答えている。内容と受講形態を示したのが図10・11である。基本はmoodle と Microsoft Teams であり、動画視聴が100%、教材配布・課題提出が９割以上に上った。

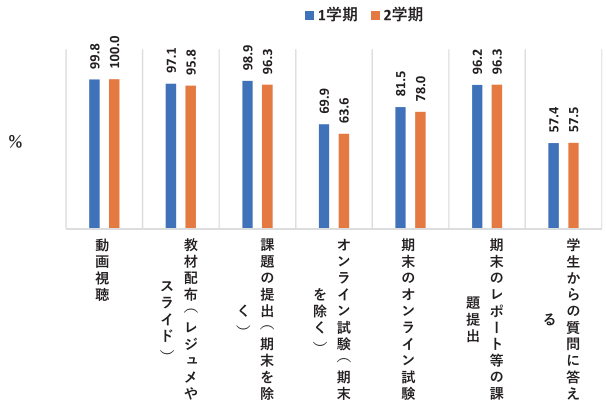
次に、図12・13は、オンデマンド型の受講実態を図示したものである。期限内の視聴・提出ならびに内容理解については、大半が「できた」と答えている。図14では、日頃の課題と期末レポートの提出状況を示したが、いずれも８割以上が「できた」「ほぼできた」と回答しており、１学期と２学期の推移を見ると向上していることがうかがえる。

一方、図15・16は、同期型オンライン授業の結果である。こちらも、大半の学生が受講経験があり、Teams は約100%、Zoom は約半数の学生に上った。ただし、図17にあるように、教材配信・課題提出は図12のオンデマンド型よりも低く表れており、むしろ演習等で使用するケースが多かった。また、２学期では、オンライン試験と学生からの質問の手段としての活用



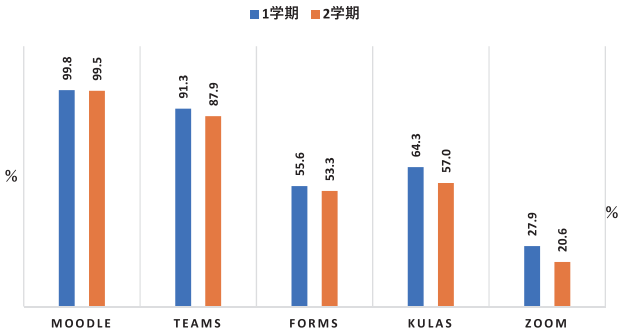
出所：高知大学人文社会科学部教務委員会『2021年度第１・2学期　人文学部・人文社会科学部オンライン授業に関するアンケート』より作成。

図９　オンデマンド型オンライン授業の受講経験



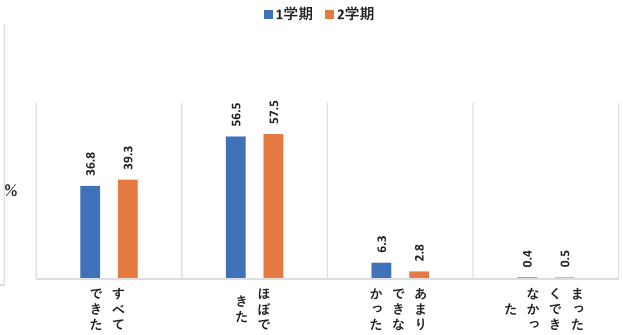
出所：図９に同じ。

図11　オンデマンド型オンライン授業の受講形態



出所：図９に同じ。

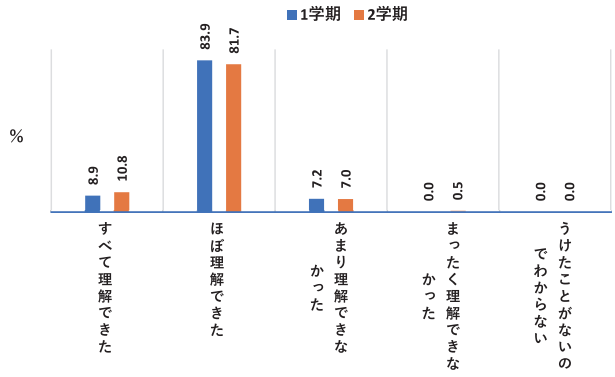
図10　オンデマンド型オンライン授業の利用システム



出所：図９に同じ。

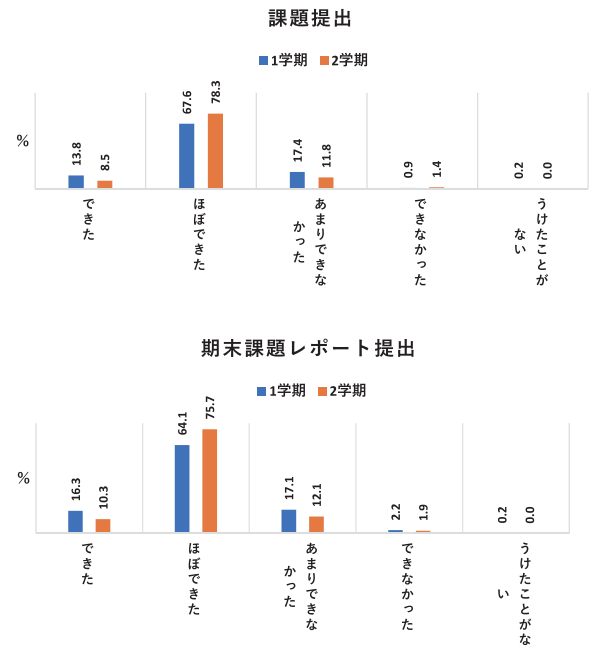
図12　オンデマンド型オンライン授業における期限内の視聴・提出

[9] 高知大学人文社会科学部教務委員会『人文学部・人文社会科学部オンライン授業に関するアンケート』2021・2022年に基づく。このアンケートは、2021年度の各学期ごとに実施したもので、回答数は１学期454人、２学期223人である。



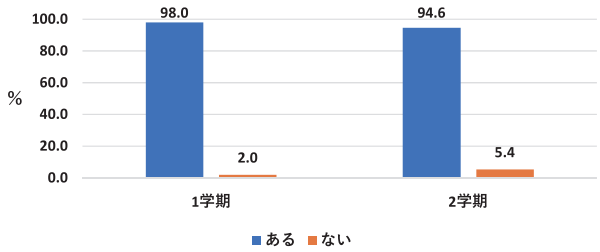
出所：図９に同じ。

図13　オンデマンド型オンライン授業における内容理解



出所：図９に同じ。

図14　オンデマンド型オンライン授業における課題提出状況

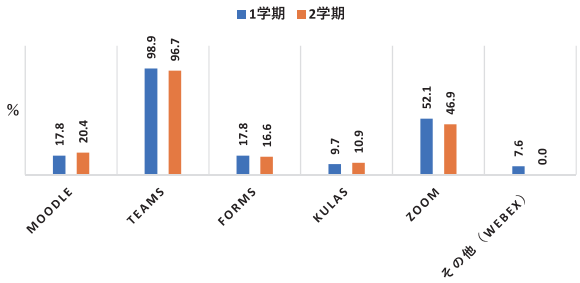


出所：図９に同じ。

図15　同期型オンライン授業の受講の有無

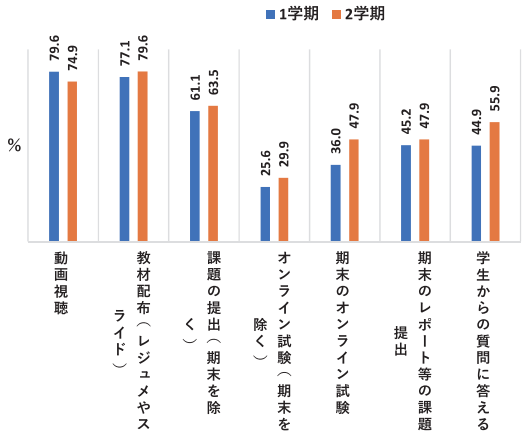
が増えていた。

次に、同期型の受講実態をみてみよう。図18の内容理解では、「できた」が９割以上を占めるとともに、１学期から２学期にかけて理解度の向上がみられた。また、図19が示す課題提出状況でも、「できた」「ほぼできた」が８割以上に達しており、オンデマンド型と同様の傾向が読み取れる。



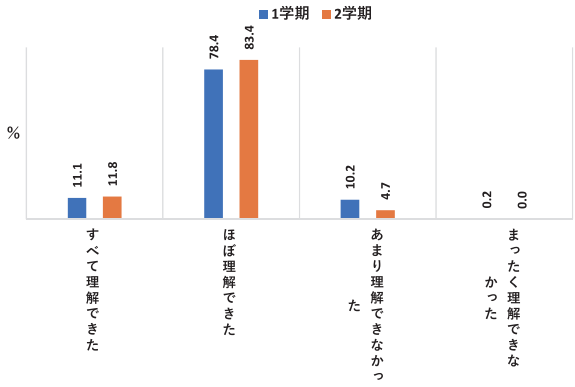
出所：図９に同じ。

図16　同期型オンライン授業の利用システム



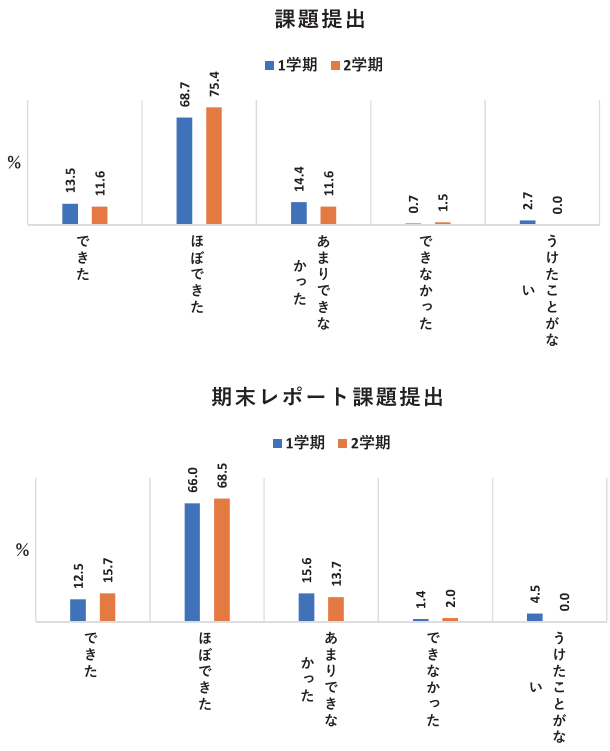
出所：図９に同じ。

図17　同期型オンライン授業の受講形態



出所：図９に同じ。

図18　同期型オンライン授業の内容理解



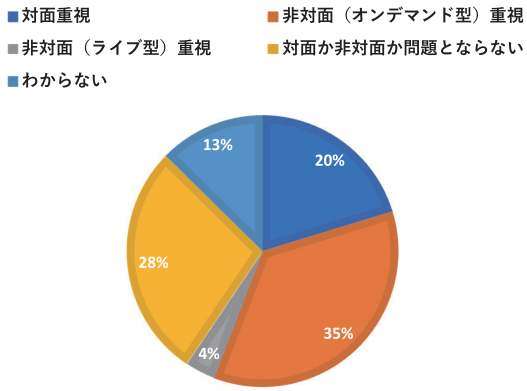
出所：図９に同じ。

図19　同期型オンライン授業の課題提出状況

では、学生はどのような授業を望んでいるのだろうか。図20は、今後、講義形式の授業を選択する際、対面と非対面のどちらを重視するかをたずねたものである[10]。これによると、「非対面（オンデマンド）重視」が35％で最も多く、「対面か非対面かは問題とならない」（28％）、対面重視（20％）の順であった。このように対面と非対面が近い数値であるが、他方で非対面ライブ型はわずか４％と格段に低かった。あわせて、今後の受講希望をオンライン講義のタイプ別で示した図21をみると、講義オンデマンド型は８割の学生が選択したのに対して、講義同期型やハイフレックス型、対面とオンデマンドの併用型は４割台にとどまった。

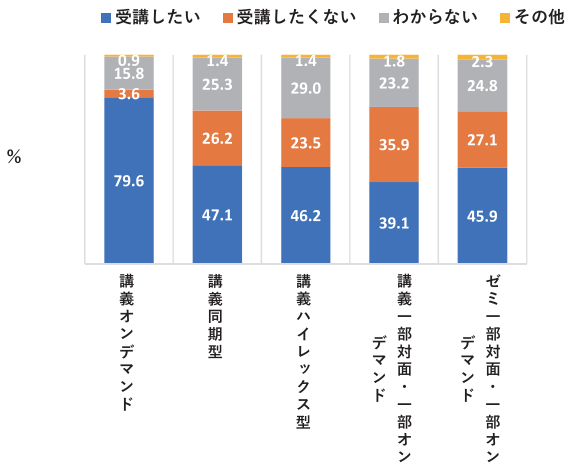
つまり、オンライン講義に対する学生の評価は、オンデマンド型は評価が高いものの、同期型やハイブリッド型では評価が下がり、対面と非対面ライブの比較では対面選択の指向が読み取れる。

[10] この質問は、2021年２学期の調査でのみ行ったものである。



出所：図９に同じ。

図20　講義選択について



出所：図９に同じ。

図21　今後の受講希望

２．オンライン授業に対する学生の意識

さらに、オンライン授業に対する学生の意識を、全学アンケート調査結果から探ってみよう[11]。

表３は、オンライン授業について、特に困ったと感じたものを、３つ選択した結果である。上位項目には、情報管理、集中力、課題の量が並んだ。また、情報管理（46→38％）、課題の量（41→29％）、通信環境（30→20％）、孤独感（21→18％）、授業の質（20→14％）は１→２学期で数値が低下しており、改善したと捉えられる。逆に、未改善・悪化項目は、授業担当者への

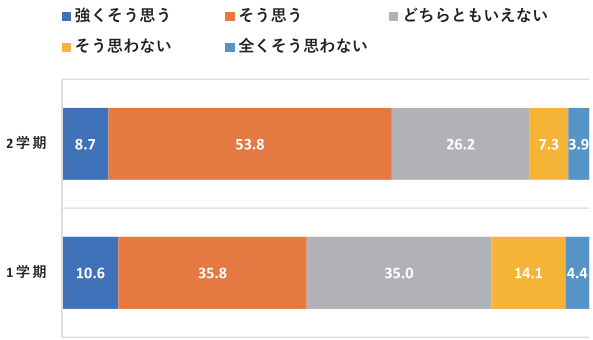
[11] 以下では、高知大学大学教育創造センター・学生支援委員会、前掲データに基づく。

表３　オンライン授業で特に困ったと感じたもの

1学期			2学期		
項目	回答数	回答者に対する割合	項目	回答数	回答者に対する割合
授業に関するメールや課題など、情報の管理が大変だった	239	46.2	授業受講中に、集中力が続かなかった	155	43.7
授業受講中に、集中力が続かなかった	238	46.0	授業に関するメールや課題など、情報の管理が大変だった	133	37.5
課題の量が多すぎて大変だった	211	40.8	課題の量が多すぎて大変だった	101	28.5
通信環境が悪く、授業が途切れてしまう、声が聞こえにくいなどのトラブルがあった	154	29.8	授業担当者に質問や相談がしづらかった	92	25.9
課題や提出物に対する教員からのフィードバックがなくて困った	139	26.9	課題や提出物に対する教員からのフィードバックがなくて困った	89	25.1
授業によって使用するツール（KULAS、moodle、Teams、Zoomなど）が違ったので混乱した	110	21.3	対面授業もあったため、オンライン授業を受講する場所などで困った	81	22.8
孤独感を感じた	110	21.3	通信環境が悪く、授業が途切れてしまう、声が聞こえにくいなどのトラブルがあった	72	20.3
授業の質に不満がある授業があった	104	20.1	教員から授業についての指示がなくて困った	72	20.3
教員から授業についての指示がなくて困った	103	19.9	授業によって使用するツール（KULAS、moodle、Teams、Zoomなど）が違ったので混乱した	68	19.2
授業期間の途中で対面授業がオンライン授業に切り替わって混乱した	88	17.0	孤独感を感じた	63	17.7
対面授業もあったため、オンライン授業を受講する場所などで困った	72	13.9	授業の質に不満がある授業があった	51	14.4
PCやKULAS、moodle、Teams、Zoomなどの操作方法がわからなくて困った	44	8.5	その他	48	13.5
体調を崩した	29	5.6	計画的に課題を提出することができないなど、最後まで受講を継続することができなくて困った	38	10.7
その他	14	2.7	体調を崩した	25	7.0
			PCやKULAS、moodle、Teams、Zoomなどの操作方法がわからなくて困った	14	3.9

注：選択肢の中から３つを選択。
出所：高知大学大学教育創造センター・学生支援委員会
『2021年度オンライン授業と学生生活に関するアンケート集計結果』より作成。

質問・相談（２学期26％）、フィードバック（27→25％）、教員の指示（20→20％）、使用ツール（21→19％）、受講場所（14→23％）等、学生への指示・対応項目に集中した。さらに、集中力が回答割合の中で最も高い点（46→44％）は、オンライン授業特有の困難さを示したものともいえる。



出所：表３に同じ。

図22　オンライン授業への満足度

表４　オンライン授業で特に好印象・良かったと感じるもの

	回答数		回答者に対する割合	
	1学期	2学期	1学期	2学期
授業時間割に縛られずに、学習できた	341	219	66.0	61.7
自己のペースで学習できた	336	219	65.0	61.7
何度でも見直せる、聞き直せるので理解が深まった	227	165	43.9	46.5
授業スケジュールや受講方法、成績評価の方法などについて、授業担当者が事前に明確な指示をしてくれた	110	108	21.3	30.4
授業動画での話し方や資料の提示の仕方などが的確でわかりやすかった	101	85	19.5	23.9
授業の内容や進め方や資料の作り方などが的確でわかりやすかった	88	74	17.0	20.8
課題の量が適切だった	71	68	13.7	19.2
授業担当者に質問や相談をしやすくするための工夫をしてくれた	58	50	11.2	14.1
課題提出の確認や内容について授業担当者が適切にフィードバックしてくれた	66	49	12.8	13.8
PCやオンラインのツール等の操作方法などについて教職員がサポートしてくれた	69	37	13.3	10.4
通信環境を改善するために大学が支援してくれた	30	15	5.8	4.2
その他	12	0	2.3	0.0

出所：表３に同じ。

次に、オンライン授業で好印象を持った点を整理したのが、表４である。時間的制約のなさ、自分のペースでの学習、繰り返し視聴が上位を占めており、自由回答では「周囲の存在を気にしなくてよかった」や「大勢の人の中で授業を受けるストレスがない」等が多くみられた。これらがオンライン授業のメリットといえる。また、担当者の明確な指示（21→30％）や話し方・資料提示の仕方（20→24％）は、１→２学期で上昇している。担当教員の工夫が学生の印象を高める際の重要ポイントであり、そうした取り組みが、図22が示す１→２学期の満足度向上（46→63％）につながったといえよう。

対照的に、学生の低評価項目や１→２学期の低下項目を挙げると、大学の環境支援（６→４％）、操作方法サポート（13→10％）、フィードバック（13→14％）が並び、今後も改善が求められる。

今度は、アンケートの自由記述から、オンライン授業に対する学生の印象・課題を抽出してみよう。まず課題面で多かった意見が、授業システムの不統一に関する混乱である。具体的には、「Zoom、Teams、moodle など授業ごとに配信サイトが変わっていたのが面

倒」「授業によって使うソフトが異なり、1つの授業でmoodleとKULASシステムを併用するような授業も･･･せめて1つの授業で使用するソフトは1つに限るなどの対策を」「課題提出期限の管理が大変なのに、途中で対面がオンラインに切り替わって管理しきれない授業が増えた。提出期限を『次週の講義時間まで』に統一して欲しい」という意見が数多く寄せられた。

また、教員間の授業内容の格差についても、多数の言及があった。例えば、「オンライン授業に慣れていない先生がまだちらほら」「無理矢理でも対面で行いたいという意思を持つ先生方が多く、学生の安全を考慮しているのか、いささか疑問」「課題の量が多すぎる」「大学関連施設が1ヵ月近く閉鎖されたのに、授業配付資料をPDFファイルで配り、印刷することを前提に授業を進める」等が、代表例である。中には、「困ったことがあり教員にメールで連絡しても、一切返信がない」等の学生対応への不満も挙げられた。

ただし、学生からは、不満に終わらせず、具体的な改善提案が寄せられたことにも注目したい。例えば、動画については「ずっとイヤホンで音声を聞いていて耳鳴り･･･動画は区切って2つくらいにすると見やすい」「1時間を超える場合、視聴力の集中力が切れるため、複数回に分けてほしい」「授業動画以外に内容を深めるための動画やサイトのURLは･･･学習を深める上で役立った」等が、改善のヒントになろう。

さらに注目されるのが、学生の生活・心理的影響である。「オンライン非同期型の講義がほとんど」であることに伴う孤独感は、多数の学生の共通意見であった。また、生活リズムの乱れについても、「（オンラインは）自分のペースで学習できたものの、生活習慣が完全に崩壊。moodleの更新通知が届けば便利」「オンライン授業では、自宅にいても授業を受けられる便利さの反面、朝早く起きる必要がない。非同期型であれば、好きな時間に受講できるものも多いため、直前まで受講しないということもあるため、生活のリズムが乱れてしまい、締切に追われることが日常的になってしまったので、ストレスを感じた」という事例が示された。さらに、「対面授業がないことにより、高校生から大学生になったという感覚が全く湧かず、入学から精神的にかなり混乱した」という回答も、コロナ禍の大学教育における無視できない課題といえよう。

Ⅲ　コロナショックと教員－学生関係の変化

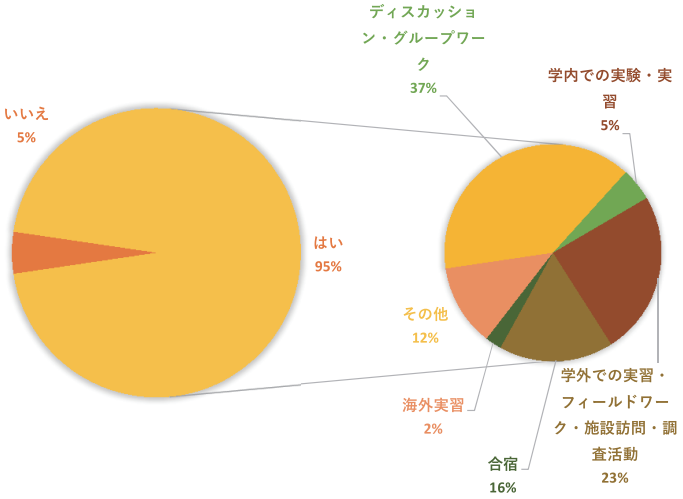
1．コロナ禍での学生教育

ここまで学生側の状況を掘り下げてきたが、学生を指導する側の教員は、コロナ禍でどのような教育を行い、学生とどのように接してきたのだろうか。本章では、高知大学人文社会科学部の教員を対象に実施したアンケート結果を軸に、教員の視点から光を当ててみよう[12]。

最初に、コロナ禍での教育実践を確認しておこう。図23は、授業・演習を計画通り行えたかどうかをたずねた結果である。やはり、大半の教員が計画通りではなかったと回答した。変更の中身は、ディスカッションやグループワーク（37%）、学外での実習・フィールドワーク等の訪問・調査活動（23%）、合宿（16%）等、オンラインでは実施不可能な活動が並んだ。また、図24より、目標が未達成もしくは変更を迫られた教員は、全体の3分の1を占めた。変更の中身は、フィールドワークの代わりに理論学習やデータ分析にシフトしたり、Teamsでのグループワーク等が挙げられたものの、変更前と同様の効果は難しいとのコメントも出された。また、オンライン化に伴う教育効果への影響については、語学教育や卒論指導で多くの意見が寄せられた。例えば、コミュニケーション・スキルでは対面と比べて「努力は倍化、結果は半分化」という声や、卒論指導ではゼミ生が一堂に会する形から個別指導に切り替わり、進捗状況の確認が難しくなったとの声が複数見られ、教える側の苦悩の姿が映し出された。

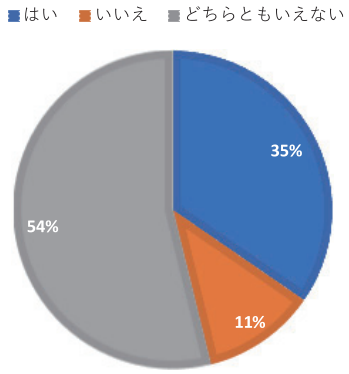
次に、オンライン授業のメリットとデメリットについては、図25のような結果となった。メリットは「どこにいても授業が聴ける」「いつでも授業が聴ける」「遠隔地のゲスト講師や学生と交流できる」が主な回答で

[12] 高知大学人文社会科学部『新型コロナ禍での学生の状況に関する人文社会科学部教員アンケート』2022年に基づく。本アンケートは、人文社会科学部教員を対象に、2022年4月28日～5月20日に実施したもので、回答数は56人中、26人（回答率46.4%）である。



出所：高知大学人文社会科学部『新型コロナ禍での学生の状況に関する人文社会科学部教員アンケート』2022年より作成。

図23　学生教育で計画通り行えなかったこと



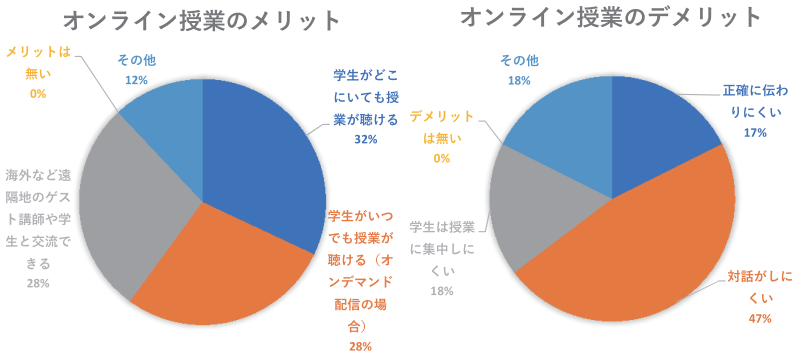
出所：図23に同じ。

図24　目標未達成・授業目標変更の有無

あった。他方、デメリットは、「対話がしにくい」「正確に伝わりにくい」「学生は授業に集中しにくい」という回答が多くみられた。

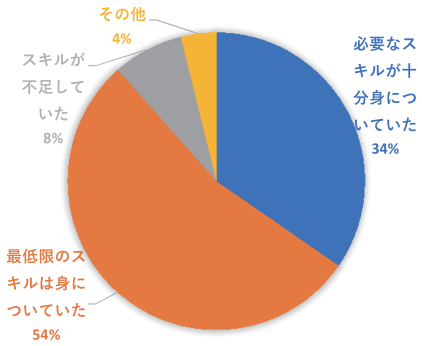
では、教員のオンライン授業の実施スキルは、どのような状況にあったのだろうか。図26が回答結果であるが、「最低限」身についていた者が過半数、「十分身についていた」が３分の１と、大半は基準をクリアできている模様である。ただし、スキル習得については、「より発展的なスキルが身についていないというよりは、身につけるだけの余裕がないことに困難を感じます。令和２年度以降、オンライン授業の実施スキルは、おおよそ通常の業務を全て行いながら習得されているものです。スキルの習得には、本来、相応の時間と資源が確保されるべきだと思います。そうした時間と資源の確保を大学として行なっているかどうかを、法人としての大学には逆にお尋ねしたい」という意見も出された。教員の自助努力にとどまらず、一層のスキル向上への全学支援も進めていくべきだろう。

とはいえ、教員の間では、オンライン化の創意工夫や、DX につながるような「新しい教育方法」への挑戦も展開された。第１に、対面授業に近い内容・経験の提供である。スライドを作り込み、講義の密度を高



出所：図23に同じ。

図25　オンライン授業のメリットとデメリット



出所：図23に同じ。

図26　オンライン授業の実施スキル

める方法をはじめ、オンラインによる県外・海外からのゲスト招聘や講演会が、主要な実践例といえる。また、就職活動中の卒論指導では、オンラインが効果を発揮したとの意見も出された。

第２に、授業の効率化である。例えば、Excel や Word のオンラインでの活用や、Notion を利用した Web テキスト作成、記述式以外の試験の採点の自動化、講義資料のペーパレス化、レジュメ・レポート類の Teams 上での一括管理等が挙げられる。

第３に、学生とのコミュニケーション手段の工夫である。Forms を使用した課題提出や、チャットによるコミュニケーションの効率化、リアクションペーパーの手書きから LMS へのシフト、提出・面談の場としての個人チャンネルの作成等の様々な実践が紹介された。他には、「質問 BOX」を Teams 内に設置したことで「ちょっとしたことも尋ねやすくなったようで、学生からの質問が増え」ると同時に、「授業をする私自身も学生が理解しにくいところ、つまづきやすいところが把握できて、とてもためになりました」といった教育成果も注目される。

２．コロナ禍での学生行動・意識と、教員-学生関係の変化

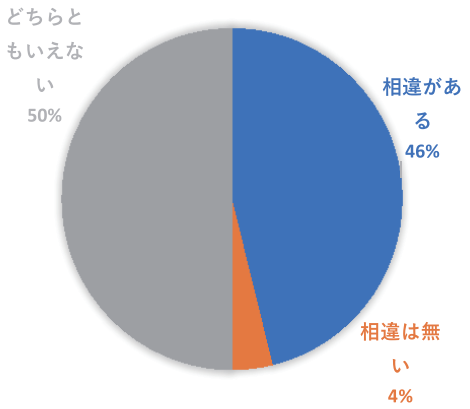
次に、教員サイドからみたコロナ前後の学生の行動・気質の変化に視線を移そう。

図27は、コロナ禍前の学生との違いをたずねた結果である。「どちらともいえない」が50%、「相違がある」が46%と拮抗していた。また、図28は、教員と学生の関わり方の変化についてであるが、「あった」が７割以上に達し、多数の教員が変化を認識していることが分かる。そこで、学生の変化について、より踏み込んだ分析をしてみよう。

まず、学生の行動・気質面での第１の変化が、学習スキル・姿勢の変化である。例えば、授業数をこなすために提出文書が雑になる学生や、英語の授業で基礎的文法の理解に難のある学生が散見されたという。また、オンライン授業への適応の反面で対面授業への渇望もある中、オンライン授業の長期化がもたらす負の影響への言及もみられた。具体的な指摘としては、時間に縛られる授業や試験のある授業の回避をはじめ、ルースなスケジュール管理、「指示待ち」「何かあればすぐに助けてもらえると思っている」等の受動的態度が挙げられる。

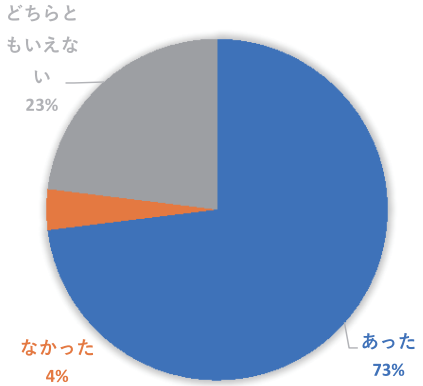
第２に、人間関係をめぐる変化である。学生同士の交友が希薄であるという意見や、直接来て質問・相談する学生が少なくなり、遠慮がちである様子が指摘された。中には、暗黙知の共有を育む機会がなくなったため、教員-学生間のコミュニケーションの成立に困難が生じたという指摘もあった。

さらに、第３の気がかりな点が、メンタル面への影響である。例えば、精神的な不調を抱える学生の割合が増加したとの印象や、コロナ禍でやる気を失って単位数が極端に少なくなった学生、人間関係を過剰に気にして課題対応ができない結果、精神的なダメージを負っ



出所：図23に同じ。

図27　2020年以降の入学生とそれ以前との違い



出所：図23に同じ。

図28　コロナ禍での教員と学生の関わり方の変化

た学生、メンタルの問題との関連でアドバイザーとしての書類作成対応を行ったケース等が報告された。

このような学生の行動・姿勢の変化に伴い、教員-学生関係の変化も、多くの教員が認識するようになっている。第１に、学生との距離感や学生把握の難しさである。「顔を合わせたことのない学生が多い」「オンラインはカメラオフ、対面でもマスク装着のため、互いの顔を見る機会はほとんどなくなった」「懇親会の不開催や卒論指導のリモート化で、人柄を知る機会が減った」「エピソードが少なく、関係の深まりは例年より浅いように思う」「オンラインに限定されることで、学生の全体像の把握が難しくなった。フィールドワークや合宿、対面での面談などから得られる情報と比較すると、その質は著しく低いものとなっている」等の声が多く寄せられた。

第２に、教員と学生の相互理解の低下である。以下はその具体例である。「顔を合わせる機会がないため、学生から気軽に教員に対して声をかける、質問するという機会が激減したように思う。コロナ前であれば、それをきっかけとして学生とのコミュニケーションが広がり、ゼミ生以外の学生との関係も深まっていったが、コロナ禍でそうした機会はなくなってしまった。全体として学生の印象が薄い。学生にも同じ思いがあると思う。」「教員-学生間の心理的距離が非常に大きくなった印象である。学生から相談を持ち掛けられることがほぼなかった。さらに、Ｒ２年度以降入学生とは対面での関係性構築ができなかったため、さらなる距離感を感じる。これらは教員-学生間の相互理解を妨げているのではないだろうか。」教員と学生の交流低下による相互理解への影響を危惧する声といえよう。

第３に、学びへの影響、一言で言えば、浅い学びである。その背景として、授業後の雑談がなくなり、質問などを出しづらくなったことや、非対面対応を学生が優先するようになったこと、個人相談の難しさ、卒論指導での意思疎通のすれ違い等が指摘された。

最後に、合理化で捨象される大学教育の意義の喪失である。具体的な意見を抜粋しよう。

> 既定の面談や授業以外での関わりが著しく減少し、また面談や授業でも目標に向けて合理化された標準的な内容以外の(雑談やノイズと呼ぶような)内容のコミュニケーションが著しく縮減しました。ある意味では教育内容がその目標に向けて合理化されたと言えるかもしれませんが、目標として明示されたもの以外の内容が削がれたことは、教育内容の根本的な部分の喪失ではないかと私は思います。特に大学での教育では、教えようと意図した内容が全てではなく、意図してはいない部分から学生が気付き、吸収し、糧にする部分が大きいのではないかと思います。

つまり、合理的なオンライン教育だけではカバーしきれない大学教育の意義を、コロナショックは再認識する機会となったと考えられる。

それでは、コロナショック後の大学教育は、今後どうあるべきだろうか。教員の自由意見を基に整理してみたい。

第１に、オンライン教育の可能性の追求である。「授業のネット化は、さまざまなダメージを学生に与えた側面がある一方で、今後の教育のあり方を変える可能性も示してくれたと思われる。とりわけ、これから期待される各種授業のコンテンツ市場は従来の教育を肩代わりし、例えば応用面を重視した教育を対面で集中的に行う等の新しい教育体系も展望させるものとなっているように感じています」という意見が、その代表例である。その際「動画を視聴し直し、きちんと理解できるまで復習ができる」点を活かしたり、「長期休みに再度復習をしたいので、個人的に視聴権限を与えてほしい」と申し出る学生への対応等、オンライン教育のメリットを活かす工夫が、これからは必要であると思われる。

その一方で、オンライン教育の限界も、第２に指摘しておかなければならない。特に、言語習得の面では「対面に比較するとオンラインでは個々の学生への細やかな目配りはしづらい」等、理想的環境とはいえないとの意見が出された。また「オンラインだと、学習における進捗状況が数値化されるためにわかりやすい反面、学生の生の反応や正直な声が届きにくいため、

ついつい課題を多く出しすぎたり、難易度が高めになってしまう傾向」や、「学生とのやりとりが減少し、例えば、コロナ以前、対面の頃は授業後の気軽な会話から学生の興味・関心の幅を広げる手助けを教員が行えていたと思うのだが、コロナ禍でそうした機会は確実に減少したと感じる」との率直な意見も出された。

したがって、オンライン教育は対面教育の代替ではなく、補完的位置づけであるというのが、共通する見解であった。中には、マルチタスクによる注意力散漫等の弊害や、非同期型オンライン授業でも対人交流とサポートが必要であるとの意見もあり[13]、教育効果を重視した対応が求められている。

その意味で、オンラインと対面の組み合わせをいかにバランスよく構築すべきかが、第３のポイントである。この間、「対面でのディスカッションや発表の機会が少なかったので、潜在力をアウトプットしきれていないフラストレーションが学生の中にあると感じている。今は対面による学生同士、教員と学生、学外者と学生の対話やディスカッション、発表などの機会を充実させて潜在力を引き出すようにしている」という取り組みや、「オンデマンド型のオンライン授業では、文献資料等の誤解や理解の浅さを指摘される機会も少なかったのではないかと感じている。今は対面で、理解を深める指導」がなされてきた。今後も、オンライン教育の補強をめぐる試行錯誤が不可欠であるといえよう。

第４に、広義の教育・人間発達への影響である。「海外へ行けない状況が２年続いた影響もあり、内向きの学生が多くなったと感じる。海外へ目を向けたり、留学の目標をもつような方向に、今後どのように学生を導けばよいか、悩むところである」といった内向き指向への危惧や、「『他人との接触がリスクである』『無理して他人と接しなくていい』と認識されたのは、マイナス方向に影響が大きいと思う。この先、『小学校から大学までずっと自室で勉強し、勤めた後もずっと在宅勤務』という人間が出てくる可能性もあるが、はたしてどんな人間になるかというと、あまり良い予感はしない」等、他者との関係性構築への不安の声が寄せられている。その意味で、狭義の教育にとどまらない人間の成長への支援も欠かせない。

こうした課題を踏まえ、最後により深い学びへの展開の必要性を指摘しておきたい。代表的な意見（一部抜粋）を、以下に紹介しよう。

> 教育内容の合理化・標準化の弊害を、あえて言語化するならば、学びに向ける意欲や姿勢、熱量の伝達が困難になっていることではないかと思います。講義であれ少人数の演習であれ、オンライン授業には「教育上の目標」に向けてより標準的な内容へと収斂する傾向があると思います。ですが、講義でも演習でも、扱われているトピックにどのような意味があるか、なぜそれが重要なのか／面白いのか、それをどこまで、どんな熱量をもって追求できるのかについては、むしろ雑談や脱線、あるいは少なくとも学生に合わせた補足など、目標に向けて合理化できない残余部分で伝わるケースが大きいのではないかと思います。この点は、卒業論文の執筆にあらわれているように受け止めています。
>
> ここ２年、私の指導している範囲内では、これまでの学生に比べて「浅いところで満足している」論文や発表が多く見られたように感じています。コロナ禍での資料・時間の制約も影響しているとは思いますが、より表面的な段階で掘り下げずに終わる要因は、そうした制約だけではないようにも思います。学生自身の声でも、他の学生と時間と場所を共有して卒論に取り組むことができなくなり、一人の孤独な作業として取り組んでいたために、より深くまで踏み込むことができなかった、という声を聞きました。教員と学生の関係、学生同士の関係の両面で、コロナ禍・オンライン化が、学び研究するコミュニティで共有される意欲や熱量にかなりネガティヴな影響を与えているのではないかと思います。

上記の意見は、大学の学びが、オンライン教育の合理化を通じて学びの「アトム化」に陥るリスクがあること、その上でいかに対話的な学びを創り出すべきか

[13] これについては、Geoffrey A. Fowler, "An Early Report Card on Massive Open Online Courses," *Wall Street Journal* ,Oct. 8, 2013も参照。

を象徴的に表したものといえる。言い換えれば、大学は、人と人との関係によって構築される社会の縮図であり、そこでの学びは、こうした関係性を抜きには達成不可能であることを絶えず意識することが求められているのである。

おわりに

以上、本稿では、コロナショックが学生教育に与えた影響について、地方国立大学の一部を構成する高知大学人文社会科学部に焦点を絞って論じてきた。最後に、全体を総括しておこう。

第１に、コロナショックが学生に及ぼした重層的影響である。目に見える影響については、少人数だが休退学が発生した点やコロナ禍２年目に若干増加した点が明らかになり、コロナ禍が学びの意思の阻害要因となった様子が明らかになった。と同時に、直近の単位取得や授業課題、将来不安、生活リズムや食生活の悪化を背景とする身体的・精神的悪化、さらには経済難や孤立化等、コロナ禍が学生生活に深い衝撃をもたらしたことも無視できない。地方大学かつ実家外で１人暮らしの学生の多さを踏まえつつ、今後は経済面・心理面でのきめ細かな対応や、孤立化防止のための情報提供、大学相談窓口へのアクセス改善等、生活支援が欠かせない実態が浮き彫りになった。

第２に、学生の学びへの影響である。まず、オンライン授業には、同期型・非同期型ともにほぼ適応しており、ある程度満足している結果が表れた。特に非同期型については、時間に縛られない点や自己のペースで繰り返し学べる点を高く評価した反面、同期型は低評価であり、対面を指向する結果が表れた。また、オンライン授業に伴う情報管理や集中力、課題量に学生は苦労しており、担当者の明確な指示や、話し方・資料提示方法の工夫、さらには利用システムの統一化等の環境支援や事前周知、操作サポート、フィードバック等の支援が今後は不可欠である。また、教員間の質的格差を是正すべく、動画方法や課題の量等、教員のスキル習得へ向けた組織的改善策も欠かせない。

第３に、教員から見た学生状況と教員－学生関係の変容である。コロナ禍は、教員の授業展開にも影響を及ぼしており、ディスカッションやグループワーク、フィールドワーク等の計画変更を強いられる中、オンラインを通じた作業効率化や学生対応ツールの導入等、対面授業のレベルに近づける工夫が模索された。一方、コロナ禍以降、内向き・受け身指向やメンタル不調等、学生の行動・姿勢に変化が見られと同時に、教員-学生関係においても距離感や相互理解の低下等が懸念され、浅い学びに向かうリスクも指摘された。

最後に、コロナショックの経験を踏まえた今後の大学教育のあり方を整理しておきたい。第１に、多様な学生に即した自主学習効果や遠隔地交流等のオンライン教育の可能性の追求である。第２に、オンライン教育の限界を踏まえた対面教育の再認識と、双方の最適な組み合わせの構築である。さらに第３に、浅い学びから深い学びへ向かうための、学びの「アトム化」から対話的な学びへの展開である。大学は、人と人との関係性の網の目である社会の縮図であり、大学での学びも、人と人との関係性抜きには不可能である。その意味で、コロナショックを契機に、オンライン授業と対面授業をいかに共進化させるかが、今後は問われているのである。

（付記）本稿は、2022年６月13日、新型コロナウイルス感染拡大と学部への影響について、高知大学長に行った報告内容を基にしている。本稿作成に際しては、人文社会科学部教員アンケートでは中川香代前学部長と人文社会科学事務室長の横山啓子さん、学生アンケートでは学務課人文社会科学部教務係長の岩崎奈津美さんのご助力を得た他、各種アンケート実施の際には同学部の学生・教職員の皆さんのご協力をいただいた。この場を借りて、御礼申し上げたい。